

## パロディとしてのミニマル・アート ——ロバート・モリス「彫刻についての覚書」の成立について

飯盛 稀 (東京芸術大学)

---

ロバート・モリス(1931-2018)は、ミニマル・アートの代表的なアーティストのひとりとされている。しかし、ミニマル・アートは、還元主義的な傾向からグリーンバーグ流モダニズムの極致と目されることもあれば、グリーンバーグからモダニズム史観とフォーマリズム批評を継承したマイケル・フリードとの対立関係などを理由にモダニズムへの反動と見なされることもあり、その名称によってアーティストを一概に分類することの是非は、より慎重に検討される必要がある。本発表では、モリスの立場を明らかにするため、彼がミニマル・アートについて理論的に説明した「彫刻についての覚書」(1966年)を対象に、テキストの成り立ちを分析することで、それが書かれた意図を解釈する。

モリスに対するインタビューを根拠に、「彫刻についての覚書」は、当初「フォーマリズム批評のパロディ」だったものが、美術批評家のバーバラ・ローズ(1936-2020)の勧めによって「皮肉」ではなく「まじめ」な議論に変更されたのだと言われている。こうした経緯について、ローズ本人に証言を求め、詳しい回答を得た研究者もいる。先行研究には、出版された「バージョン」にパロディの痕跡を認めるものや、モリスの制作に風刺的な傾向があることを指摘したものもあるが、いずれの論考においても、「彫刻についての覚書」は、改稿されており、「オリジナル」は発表されなかったことが想定されている。

ローズは、モリスが美術史で修士号を取得しており、学術的な著述に長けた人物であることを強調したが、しかし、モリスは必ずしもローズが提案したように「まじめ」な論述を行ったとは言えない。というのも「彫刻についての覚書」には他の書籍からの直接引用が3箇所認められるが、クレジットすべき人物が違っているなど、いずれも問題のあるしかたで行われているのである。本発表では、それらの典拠を調査することから始め、実のところ、これまで言われてきたような改稿は行われていない可能性があることを示したうえで、「彫刻についての覚書」を「フォーマリズム批評のパロディ」として再読する。

従来、モリスをはじめミニマル・アートのアーティストたちに対するメルロ＝ポンティの影響が、くり返し指摘されてきた。しかし、「彫刻についての覚書」で援用されたのは、むしろルドルフ・アルンハイムのゲシュタルト心理学的な理論である。アルンハイムの議論はグリーンバーグの論調に類するものであり、それを取って応用した制作には、モダニズムを戯画化する狙いがあったと考えられる。そのことをテキストの比較か

ら検証し、ひいては、モリスにとってミニマル・アートの制作がプロセス・アートなどの次なる展開を準備するための過渡的なものにすぎなかった可能性を提示する。